

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26870651

研究課題名(和文) 実証主義的家族 ベルティヨン家と19世紀末フランスにおける実証主義の具体的展開

研究課題名(英文) A positivist family: the Bertillons and the influence of positivism at the end of the nineteenth century in France

研究代表者

橋本 一径 (Hashimoto, Kazumichi)

早稲田大学・文学大学院・准教授

研究者番号：70581552

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の主たる目的は、19世紀末フランスにおける実証主義の展開の思想史的研
究、およびベルティヨン家についての伝記的研究の二点である。これらの二点について、それぞれ以下のよう
な成果をあげた。

すべての自然現象を物理法則によって説明しようとする実証主義にとってのアポリアが「身体」であったこと
を明らかにし、「病気」や「痛み」という概念に着目することで、このアポリアに新たな視角からアプローチす
る可能性を示した。

19世紀フランスの実証主義を体現するベルティヨン家の、アルフォンス・ベルティヨンに注目し、彼と関わり
の深い写真技術の歴史を考察することで、写真イメージの思想史的研究への足がかりを得た。

研究成果の概要(英文)：This study consists of two parts: (1) Epistemological research on the
development of positivism at the end of the nineteenth century in France. (2) Biographical research
on the Bertillon family. The results of these two approaches can be explained as follows:

(1) By demonstrating that positivism meets the body as its aporia when it wants to explain all
natural phenomena by physical law, this study focuses on the notions of "disease" and "pain" in
order to find a new approach to tackle this aporia.

(2) The Bertillon family has well incorporated the atmosphere of positivism in France at the end of
the 19th century. Alphonse Bertillon, one of the members of this family, has mainly contributed to
the development of photographic technology. By shedding light on the history of photography, this
study tries to reflect on the photographic image from an epistemological point of view.

研究分野：思想史、表象文化論

キーワード：西洋思想史 写真史 表象文化論 医学史

1. 研究開始当初の背景

実証主義の創始者オーギュスト・コントの再評価の機運は、近年になって世界的に高まってきた。米国の Mary Pickering による三巻本の伝記が 2009 年に完結したほか、フランスでも 2000 年代に入って二冊の伝記が刊行されている。日本においても白水社より『コント・コレクション』全二冊が刊行されたことは記憶に新しい。コントの思想を前期と後期に分け、前期の思想を引き継いだエミール・リトレらから、エミール・デュルケームの社会学に至るまでの系譜を跡づけるのが、通常 of 思想史的理解である。しかしながら実証主義とは、単なるディシプリンの問題ではなく、有機体としての人体から社会までの、人類のすべての次元に関わろうとする、一種の思想運動でもあった。実際、実証主義はコントとその弟子たちのサークルの枠組みを超えて、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのフランスの知識人階級の価値観や生活様式とも、少なからず連動しあっていたのである。学説史からはこぼれ落ちてしまう、このような思想運動としての実証主義に焦点を合わせる必要性を認識したことが、この研究に取り組むことになった背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、実証主義の具体的な展開を、単にコントらの思想家の著作の中だけでなく、様々な技術や思想の実践に見出すことである。その上で本研究は、実証主義的な思想を現実に応用しようとするときに直面する困難を浮かび上がらせる。そうした困難を今日的な問題として新たに引き受けることが、本研究の最終的な目的である。

3. 研究の方法

本研究が採る方法は主として以下の三つである。

(1) 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて広く興隆した心霊主義の営みを、実証主義的な思想の実践として捉えなおす。魂の不死性を信じ、その実在を科学的に証明しようとした心霊主義は、19 世紀末における実証主義の一つの派生物であると言えることができる。この実証主義の営みを、当時の文献に立ち返りながら詳しく精査し、「魂」を客観的・科学的に証明しようとする試みが、どのようなジレンマに直面することになったのかを明らかにする。

(2) 実証主義的な思想が医学に与えた影響を考察する。あらゆる自然現象を物理法則によって説明しようとする実証主義的な思想は、「身体」や「病氣」という概念をどのように

変化させたのか。主として 19 世紀フランスの医学文献を精査することにより、これらの概念の変化を跡付けながら、そこに含まれる今日的な課題を浮かび上がらせる。

(3) アルフォンス・ベルティヨンが開発した「ベルティヨン法」は、客観的な手がかりにより犯罪者を特定するための技術であり、とりわけ彼が重視していたのは写真技術である。本研究は、実証主義の理想を体現するイメージとみなされた写真の客観性を再検討する。主として 19 世紀フランスの写真雑誌を網羅的に調査しながら、写真のイメージと客観性との関係をたどり直す。

4. 研究成果

本研究の研究成果は主として以下の三点に要約することができる。なおこれらの三点は、上述の研究方法の三点にそれぞれ対応している。

(1) 「魂」の実在性を科学的に証明しようとした心霊主義の営みとは、実証主義的な思想の一つの派生物である。このような心霊主義の実践における最大の争点とは、心霊の同一性の問題であった。すなわち霊媒によって呼び出された心霊が「誰であるのか」が、しばしば降霊会における議論の中心になったのである。しかしながら、霊媒たちが、写真さらには指紋を用いて、客観的な同一性の証拠を示そうとした途端に、霊媒のいかさまが暴かれるなどして、心霊主義の企図は頓挫してしまう。心霊の同一性を証明するものは、結局のところ、降霊会に列席した人々の証言でしかない。本研究はこのように、心霊主義の営みにおいて、実証主義的な客観性がいかにして頓挫するかを明らかにした。この成果は学会発表 および図書 に寄稿した論文として公表されている。

(2) 実証主義的な考え方によれば、「身体」とは器官の集合体に還元され、「病氣」とはこれらの器官の失調を意味することになる。本研究は、このような考え方が医学にもたらした変化を、「病氣」と「病人」の分離として捉え直し、そのことの意味を多様な観点から考察した。「病氣」と「病人」の分離とは、レントゲンや内視鏡などの診断技術の登場により、「病人」が症状を自覚する前に、医師が「病氣」を発見してしまうような事態である。本研究はまず、図書 に寄稿した論文、ならびに論文 において、こうした事態が医学だけでなく他の分野にも生じていたことを示し、「犯罪」と「犯罪者」を分離しようとした 19 世紀末フランスにおける「動物犯罪学」の試みについて検討した。

続いて本研究は、この「病氣」と「病人」の分離が、あらゆる人間を潜在的な病人に変えてしまう事態に着目し、まず論文 におい

て、医学における「慢性疾患」の位置づけの変化をたどり直した。さらには論文において、もはや症状の治療が医学の主たる目的ではなくなった事態が、「エンハンスメント医療」という新たな医療を生み出すに至った過程を振り返った。

さらには本研究は、このような医学が、最終的には「死なないこと」と「生まれないこと」の二者択一に陥ってしまう事態を指摘し、論文において、「痛み」の概念に着目することで、こうしたジレンマから脱却するための新たな身体観の構築を試みた。

(3)司法写真のシステムを発案し、写真の修正をタブー視したアルフォンス・ベルティヨンが、写真の歴史において極めて重要な役割を占めていることは、これまでもたとえばアラン・セクーラの著名な論文などにおいて指摘されてきたことである。本研究は、ベルティヨンが確かなものにした写真と客観性の結びつきを、写真史の中に置き直し、様々な観点から再検討を加えた。

論文においては、瞬間写真が技術的に成立する過程をたどり直した。そこで検討したのは、フィルムの発明に不可欠だったセルロイドの役割についてである。瞬間写真により爆発などの事件現場が写真に収められるようになるには、可燃性の極めて高かったセルロイドにより、写真というメディア自体が一種の爆発物になる必要があったことが、本研究により明らかにされた。

論文および学会発表において検討したのは、三脚の歴史である。三脚は写真にとって不可欠な道具でありながら、これまでの写真史研究においては、まったくと言っていいほど調査がなされてこなかった。このような未踏の領域に着手した本研究が、詳細な文献調査により明るみに出したのは、19世紀の写真をめぐる言説において、三脚が問題にされる際には、しばしばその「高さ」が争点となっていたという事実である。すなわち、カメラを「目の高さ」に設置できることが、三脚の重要な役割であると、繰り返し論じられていたのである。この事実を手がかりに、本研究は、写真が「見たまま」の客観的な映像として受け入れられるのは、それが「目の高さ」のイメージであることからもたらされる擬制であるとの可能性を示した。

学会発表において考察したのは、写真におけるサイズの役割である。写真はしばしば足跡などの痕跡に比されてきたが、原理的にオリジナルのサイズを保持するこれらの痕跡とは異なり、写真が被写体のサイズを保つことは稀である。本研究は、19世紀の半ばから今日に至るまで、例外的な場面で試みられてきた「原寸大」写真の歴史を振り返った。それにより明らかになったのは、写真が「原寸大」を目指そうとすると、写真はしばしば「写真ならざるもの」に変質してしまうという事実である。たとえば写真による絵画の

原寸大の複製は、しばしば絵画そのもののように取引されてきた。これにより本研究が明らかにしたのは、写真が被写体を「ありのまま」に表象するとされるのは、実際には被写体と異なるサイズの、しばしば極めて小さなイメージであるときのみであるという事実である。

学会発表においては、写真と修正の歴史について考察した。フランス国立図書館での文献調査により、写真修正を扱った19世紀の戯曲を発見した本研究は、そこにおいては修正が写真をむしろ現実に近づけるための手段として描かれていることを明らかにした。ところがやがて瞬間写真の成立により、写真が現実を「ありのまま」に写すものとみなされるようになると、修正は現実を歪めるものだとの認識が広まるようになる。こうした歴史を確認した上で本研究は、常に現実との参照関係で問題にされてきた修正が、デジタルの時代を迎えて、もはや現実とは関係のないイメージを生み出す可能性を提示した。

以上の三点にわたる成果は、「身体」と「イメージ」をめぐる思想史的な考察のもとに統合されることになる。論文においては、ハンス・ベルティンクの「イメージ人類学」にその手がかりを求めた。さらに学会発表においては、南方熊楠の思想に、「イメージ」をめぐる新たな思想の萌芽を見た。その上で本研究は、「フェティシズム」という概念の思想的研究に着手することで、ベルティンクの観点とは異なる視角から、「身体」と「イメージ」の問題に取り組むことができることを見出した。この新たな視角は、2017年度より科研費（基盤C）の交付を受けることになった研究課題「フェティシズムの思想史 19世紀西洋における「所有する主体」の誕生と身体」として、本研究の成果を引継ぎつつ、展開される予定である。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

橋本一径、「痛み」は誰のものか?、Cancer Board Square、3巻1号、2017年、査読無、pp. 162-166.

橋本一径、慢性疾患は医学の敗北か?、Cancer Board Square、2巻3号、2016年、査読無、pp. 216-220.

橋本一径、「生まれない」ための医学 エンハンスメントの未来、Cancer Board Square、2巻2号、2016年、査読無、pp. 406-410.

橋本一径、誰のものでもない体、Cancer

Board Square、2 卷 1 号、2016 年、査読無、
pp. 198-202.

橋本一径、いかにして私たちはイメージに
生気を吹き込んでいるのか ハンス・ベル
テック『イメージ人類学』をめぐって、国
立新美術館研究紀要、2、2015 年、査読有、
pp. 264-272.

橋本一径、三脚写真論、photographers '
gallery press、no. 13、2015 年、査読無、pp.
58-68.

橋本一径、動物は病気にならない、Cancer
Board Square、1 卷 1 号、2015 年、査読無、
pp. 154-159.

橋本一径、火災写真論 1886-1897、
photographers ' gallery press、no. 12、2014
年、査読無、pp. 160-170.

〔学会発表〕(計 5 件)

橋本一径、「Debunking », ou le nouvel
enjeu de la retouche photographique à l '
ère numérique、Au-delà de la véracité :
reconsidérer l ' expérience photographique
(早稲田大学、2016 年 10 月 25 日)

橋本一径、ロンドンの足跡、東京の指紋
南方熊楠とヘンリー・フォールズ、特別企
画展講演会「ロンドン時代の南方熊楠」(南
方熊楠顕彰館、2016 年 5 月 3 日)

橋本一径、An Unfaithful Trace: A History
of "Life-size" Photography、フンボルト
コレク東京「思考手段と文化形象としての
イメージ」(東京大学駒場キャンパス、2016
年 4 月 10 日)

橋本一径、Le trépied, la perche à selfie, le
drone : une histoire des supports de l '
appareil photographique、日常 とは何か
(青山学院大学、2015 年 12 月 5 日)

橋本一径、魂は声を持つか 心霊主義に
おける音声メディアと幽霊のアイデンティ
ティ、声と文学(早稲田大学、2014 年 12 月
13 日)

〔図書〕(計 2 件)

編者：鈴木雅雄、塚本昌利、著者：橋本一
径、他 20 名、平凡社、『声と文学』、2017 年、
412-434

編者：真野倫平、著者：橋本一径、他 14
名、行路社、『近代科学と芸術創造』、2015 年、
59-76、137-151、383-392

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

橋本 一径 (HASHIMOTO, Kazumichi)
早稲田大学・文学学術院・准教授
研究者番号：70581552